

緑の教育

緑の自然のごとく あしたをひらく豊かな心

緑の若葉のごとく あしたを創る確かな学力

緑の大樹のごとく あしたを担うたくましい身体

学び続ける教師を目指して

始良・伊佐教育事務所長 児玉 恭子

令和4年は皆さんにとってどんな1年だったでしょうか？コロナ禍対応に苦労？ICT対応に奮闘？W杯に励まされた？私は、学校現場の皆さんに希望の光を見せていただいた年でした。様々な制限に悩まされながらも、工夫しながら懸命に授業や行事、研修に取り組む先生方、限られた時間での運動会で精一杯走り、踊り、応援する子供たちの生き生きとした笑顔。大変なことや暗いニュースも多い中、教育はやはり希望、明るい未来を作る力の源であると再認識した年でした。

前号では、これからの時代を生きる子供たちに必要とされる資質・能力について触れましたが、今回は、これからの教育を担う教師に求められる資質や能力について考えたいと思います。ご存じのとおり、免許更新制の廃止に伴い、新たな教師の研修制度が始まります。どのような資質を身に付けなければならないかステージ毎に示された「かごしま教員等育成指標」に照らし、自分に必要な研修を管理職の先生方と相談しながら計画・実施する。つまり、自らの課題を見つけ、見通しと計画をもって主体的にその解決に当たることが求められます。オンライン研修などを利用した個別最適な学びや、同僚や他校の先生方等との協働的な学びの一体的充実を図りながら。聞いたことのあるワードばかりですね。教師の学びも子供の学びと同じです。

初任の頃に読んだ大村はま先生の「教えるということ」の一節を思い出します。「子どもというのは、身のほども忘れて、伸びようとしたり、伸びたいと思っている人間です。…その子どもたちと同じ気持ちになることが、まず大事でしょう。」大切なことは今も昔も変わらないのかもしれないかもしれません。

アクティブ・ラーナーである教師こそが、子供たちをアクティブ・ラーナーたらしめることができます。そのことこそが教師の創造的で魅力のある仕事です。私たち教育事務所もそのための情報提供（本号は校内研修・生徒指導・学力向上・サービスの厳正確保という観点から）に努めます。

令和の日本型学校教育を担う教師及び教職員集団

- ・ 変化を前向きに受け止め、**教職生涯を通じて学び続ける**
- ・ 子供一人一人の**学びを最大限に引き出す**役割を果たす
- ・ 子供の**主体的な学びを支援する**伴奏者としての能力も備えている
- ・ **チームとして力を発揮する**
- ・ **教師が創造的で魅力ある仕事であることが認識され、教師自身も志気を高め、誇りを持って働くことができる**



<中教審答申より一部抜粋>

県民総参加で、かごしま国体・かごしま大会を盛り上げよう!!

来年10月に開催されるかごしま国体・かごしま大会(以下「両大会」という。)まで、いよいよ1年を切りました。両大会には、選手・監督や大会関係者、観覧者を合わせて、およそ**80万人の方々**が来県すると見込まれています。両大会が大成功に終わるとともに、本県を訪れる一人でも多くの方々に「鹿児島に来て良かった。また鹿児島に来たい。」と思っていただけるように、私たち県民が両大会への理解を深め、**おもてなしの心でお迎え**することが大切です。

そのため、県実行委員会では、出張授業や「2023おもてなし隊」の募集、「心のバリアフリー」啓発資料の周知等、様々な活動を進めています。県実行委員会等とタイアップし、**障害者スポーツ体験**や「ゆめ～KIBAIYANSE～ダンス」を通して、両大会に向けた気運を盛り上げている本地区の学校が増えています。また、両大会までのカウントダウンボードを作成し、校内に掲示している学校もあります。「1学校1実践」を合言葉に、各学校で両大会に関する活動に積極的に取り組んでいただき、両大会に向けた気運を醸成していきましょう。

実行委員会
ホームページ

障害者スポーツ体験(富隈小)

日々の授業改善につながる授業研究研修の充実

大切にしたい授業研究研修後の「振り返り」と「次の一手」！

自校の取組状況を確認するためのポイント

- 「振り返り」
- ✓ 協議内容を踏まえた課題が整理されていますか？
 - ✓ 課題解決の重点や優先順位が決まっていますか？
- 「次の一手」
- ✓ 共通実践内容が具体的に設定されていますか？
 - ✓ 実践を通して課題解決に迫ることができていますか？

「振り返り」から「次の一手」につなぐ実践検証のサイクル

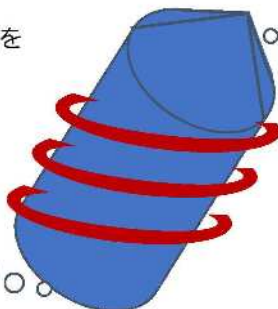
- ① 授業研究研修で磨いた授業分析力を生かして、

◆ 授業構想力 up ↑

◆ 授業実践力 up ↑

を目指します。

授業研究研修(1回目)



授業研究研修(2回目)

- ② 授業実践を通して見出した新たな問題を解決するための授業レベルの仮説

◆ ○○すれば[指導方法の工夫]

◆ □□するだろう[学びの姿]

を設定します。

実践検証のサイクルを構築して授業改善に取り組む学校の実践例

(コアスクールプロジェクト指定校・伊佐市立大口中央中学校の実践を基に作成)

① 授業参観



教員は、一人の生徒に絞って参観します。教師の働きかけに対する

- 生徒の反応や発言
- ノートの記述等、**学びの事実**を記録します。

- ・ 事象提示で、「うあ、すごい！どうして？」と**呟**いた。
- ・ 先生の指示の後、「えっ、何をするの？」と隣に**聞**いた。
- ・ 班の話し合いで、「△△したらいいと思う。」と**提**案した。
- ・ 振り返りでは、「□□だから○○が大切だ。」と**書**いた。

② 付箋づくり



観察記録を基に、生徒の学びの事実を1つずつ付箋に転記します。その際、生徒の**学ぶ姿が客観的に捉えられているかどうかを確認**します。

- ・ 回答共有のAさんの考えに何度も頷いた。(○)
- ・ クラゲチャートを使って考えを整理した。(○)
- ・ **楽しそうに**実験に取り組んでいた。(×)
- ・ □□という発想が**とてもおもしろい**。(×)

※ 主観的に捉えたものはNGです！

④ 共通実践内容の設定

- (短期展望)
- 1 自己肯定感を高める行事や活動の設定
 - 2 話し合いの型(マニュアル)の作成
 - 3 座席や班の編成、アイスブレイク、SGE
 - 4 個別の対応(ヒントカード、ジャンプカード)
 - 5 絵図の掲示や動画の活用
- (長期展望)
- 1 段階的な問いかけの工夫と充実
 - 2 話し合い活動の充実
 - 3 学びやすい雰囲気(SOSが出せる環境)
 - 4 「書く活動」の充実
 - 5 視覚教材を用いた指導の工夫

大口中央中では、教科等部会や学力向上委員会**で共通実践内容の「振り返り」や、新たに行う授業研究研修に向けた「次の一手」を検討**しています。

《 大口中央中学校が取り組む「次の一手」 》

対話活動の充実による読解力の向上！

③ 授業分析



大口中央中では、①見通し、②ICT、③対話、④知識・理解の視点から**学びの事実を整理し、目指す姿に向かうために必要な支援や指導等について協議**しています。

- ・ 話し合い活動で、生徒たちは単にノートを見せ合うだけだった。対話のさせ方をもっと考えなければ！
- ・ まとめを最後まで書き切れない生徒がいた。まとめの書かせ方や書く時間の確保について検討しなければ！

★御意見・御感想をお待ちしています。

☎ : 0995-63-8137

✉ : airaisa-shido@pref.kagoshima.lg.jp



「個別と具体で」対応を ～一人一人の児童生徒に寄り添う～

1 「生徒指導提要(令和4年12月)改訂版」について

生徒指導に関する学校・教職員向けの基本書として、文部科学省が発行している『生徒指導提要』が、12年ぶりに改訂されました。

改訂版は、印刷や製本等は行わず、デジタルテキストとして文部科学省のホームページに公表されています。これは、本書が教職員や教育委員会等の担当者だけでなく、医療や福祉、警察、司法等多くの方々に読まれ、活用いただくことを想定しており、関連情報に容易にアクセスできるなど、読み手の活用のしやすさを考慮しているからです。

改訂の主な内容は以下のとおりです。

(1) 「積極的な生徒指導」の充実

- 児童生徒の問題行動等の発生を未然に防止するため、目前の問題に対応するといった課題解決的な指導だけではなく、「成長を促す指導」等の「積極的な生徒指導」を充実しています。

(2) 個別の重要課題を取り巻く関連法規等の変化の反映

- 個別課題（いじめ、不登校、児童虐待、自殺、多様な背景をもつ児童生徒への対応等）について、平成22年の生徒指導提要作成時からの社会環境の変化（法制度、児童生徒を取り巻く環境等）やそれらに応じた必要な対応等について反映しています。

(3) 新学習指導要領やチーム学校等の考え方の反映

- 生徒指導全般に係る事項として、児童生徒の発達の支援、チーム学校、学校における働き方改革、多様な背景（障害や健康、家庭的背景等）をもつ児童生徒への生徒指導等について反映しています。

2 本地区の不登校の状況について

(1) 地区不登校児童生徒数の推移

	平成29年度	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度
小学校 (在籍率)	68人 (0.50%)	114人 (0.84%)	117人 (0.85%)	146人 (1.07%)	200人 (1.46%)
中学校 (在籍率)	276人 (4.21%)	331人 (5.04%)	370人 (5.77%)	375人 (5.82%)	404人 (6.23%)

〈令和3年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査」〉

(2) 一人一人の児童生徒に寄り添うために…

本地区の不登校児童生徒数は増加傾向にあり、生徒指導上の大きな課題となっています。「令和3年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査」によると、昨年度、一年間で30日以上休んだ児童生徒数は、小学校200人、中学校404人にのぼります。この数字は、学校が取り組んだ不登校対応の結果であります。さらに、小学校で200通りの対応、中学校で404通りの対応で取り組んだ結果になります。一方、不登校0の学校があるのも事実です。管内小・中学校93校中32校です。

言うまでもなく、子供にとって学校とは、子供たちが集団で教育活動を展開し、学びを深める場であり、未来の社会の創り手としての資質・能力を身に付けるところです。しかしながら、学校生活への不安や悩みは、一人一人異なるため、「学校に行けない」という状況の子供へは、「個別と具体で」対応せざるを得ません。

(3) 不登校を生まないために…

不登校の児童生徒の抱える課題はどういうところにあるのでしょうか。単に夜更かしなど生活リズムの乱れに起因するものや、いじめの問題も含め、何らかの原因で「心の傷」を負っているケースも少なくありません。児童生徒の心情に寄り添うことなく登校を強ければ、事態をますます悪化させるだけでなく、児童生徒のその後の人生にも大きな影響を残すこととなります。こうしたことも踏まえ、本人だけでは解決できないことや、本人の抱える状態などに早く気付いて支援することが求められています。

本地区における不登校児童生徒の在籍率を見ると、小学校と中学校の間で大きな隔たりがあります。小中連携を通して、児童生徒の成長を見据えた取組が必要です。また、不登校のきっかけとなっているのは、「無気力」や「不安や情緒的混乱」などでくくられますが、実情は一人一人違います。深い子供理解、学校内・学級内での居場所づくり、自己存在感や自己有用感を味わわせるような教育活動の展開など、一人一人に寄り添った適切な対応をとることが大切です。

令和4年度全国学力・学習状況調査の結果から

- ・ 小学校は、全国と同等(算数)、または上回る結果(国語・理科)
- ・ 中学校は、全国と同等(国語・理科)、**数学は全国を下回り課題あり!**

このグラフから分かることをまとめてみましょう。

教師の取組(授業改善)



- ・ 文章、図表・グラフ等を読み取る力を高める。(例: 図表・グラフから分かることを児童生徒に考えさせ、発話させる時間の設定等)
- ・ 文章や口頭で、根拠を明確にした説明をする機会を意識的に設定し、思考・判断・表現の力を高める。
- ・ 課題となっている分野(一次方程式、証明等)で、補充指導・個別指導を行う。
- ・ 授業とリンクした演習問題等を定期的・継続的に実施する。

聞き返す
発問

児童生徒の取組

わたしは〇〇と
考えました。なぜ
なら...からです。

- ・ できなかった問題や分野は、できるようになるまで取り組む。
(例: テスト等は100点になるまで繰り返す。)
- ・ 自分の考えや意見を書く。その際、
どうしてそのように考えたのかまで
書く。
- ・ 話し合いでは、自分以外の人の考
え・意見と自分の考え・意見とを比
較して、共通点、相違点、新たに気
付いたところ等をメモする。



分かった!
できた!

知識・技能

活用する力

評価・改善
する力

→ **確実な定着を!**

服 務 規 律
の
厳 正 確 保

飲 酒 運 転 の

飲 ん だ ら
乗 る な !

根 絶

乗 る な ら
飲 む な !

翌 朝 の 運 転
は 注 意 !!

同 僚 へ の
声 かけ も !!

- 人命を奪う恐れのある非常に悪質で危険な行為であることを認識していますか?
- 特に法令を遵守すべき立場にある学校職員にとって、決して許されない言語道断の行為であり、懲戒免職を含む厳しい処分としていることを認識していますか?
- 飲酒運転を絶対にさせない認識をもっていますか?

- ① 地区内における交通事故件数が著しく増加!
 - 危険な状況を予測して運転する=かもしれない運転を。
 - スマートフォン等を操作しないこと。
- ② 会計事務の適正化と金品の管理の徹底!
 - 会計事務のチェック体制の確立を。
 - 私費負担経費の会計事務は、公金と同様の意識で適切に扱うこと。

シリーズ! 始良・伊佐教育事務所員が紹介する 私の元気の出る言葉 ⑩

「力を抜いて。そして『だ』も抜いて。」

異動のたびにやってくる1年目。これまでに、1年目を5回経験しましたが、それぞれの1年目を今でも鮮明に覚えています。期待や不安、緊張の中で出会った新しい仲間とともに、新たな発見の中で過ごした時期は、厳しいこともありましたが、今でも暖かい思い出として残っています。

緊張で体全体に力が入っている私に、先輩が、「力を抜いてやればいいよ。」と声をかけてくださいました。その後に続いた言葉が「『だ』も抜いて頑張って。」でした。すぐに意味を理解できなかった私でしたが、「1年目だからの『だ』を抜いて言い訳せずに、今すぐに目の前の課題に全力でぶつかりなさい。」と諭してくださったのです。

自分に言い訳をするときに「〇〇だから」を使ってしまいがちです。この言葉は、消極的な自分が出てしまいそうになったときに、「前向きにがんばろう!」と気持ちを新たに、自分を奮立たせてくれる言葉になっています。(S.K)